

美術学校校友会月報』第十一卷第六号は表紙に肖像写真を掲げ、十ページをその追悼記事と遺作(本校所蔵)紹介に充てている。玉章は明治二十一年から本校に勤務し、本校および家塾で多数の画家を育成するとともに帝室技芸員(二十九年)、古社寺保存会委員(三十年)、各種博覧会および文展その他の委員をつとめ、同四十三年に至って本校教授の中では初めての勅任官となり、同四十五年に病氣のため本校を辞任した。

葬儀は二月十七日に本所押上の菩提所真盛寺で行われ、一千余名の会葬があり、門人総代端館紫川、川端画学校職員総代福井江亭、同校生徒総代、東京美術学校校長正木直彦、帝室技芸員総代高村光雲および日本美術協会、文墨協会その他団体代表者の弔辞朗読があった。墓は関東大震災後、芝伊皿子の正源寺に移され、側らに記念碑が建てられた。

本学構内の川端玉章銅像(胸像)は福井江亭その他門人が玉章の古稀の祝いに川端家に贈ったもので、原型は武石弘三郎、鑄造は大峽武司。大正三年に東京美術学校に寄贈された。なお、昭和七年四月に至り、結城素明その他門人により別に川端玉章翁碑(香取秀真作)も構内に建てられた。また、大正二年に川端家から日本画科生徒のための奨学金千五百円が本校に寄贈された。

③ 石川光明死去

大正二年七月三十日、彫刻科教授、帝室技芸員石川光明が死去した。牙彫界の第一人者であり、本校の草創期から高村光雲と並んで木彫、牙彫の指導にあたり、日本美術協会、彫工会、文展その他の



石川 光明

審査員を歴任したが、明治四十四年自宅全焼の悲運に見舞われ、また、胃癌に罹り、本年五月末より引籠って療養していた。『東京美術学校校友会月報』第十二巻第五号に追悼文と光雲の追憶談、肖像および最近作の写真が掲載されている。葬儀は八月二日に谷中斎場で営まれ、浅草の龍福院に埋葬された。

大正四年春、本校で石川光明の遺作展が開かれ、構内に銅像が建てられた。これについては『東京美術学校校友会月報』第十六巻第一号に次のように記されている。

○石川光明翁遺作展覧會 同會は豫定の通り四月一日より三日間、東京美術學校文庫に於て開催せられたり、出品二百餘點は淺草松葉町時代、下谷竹町時代、眞島町時代、天王寺時代に分ち階上階下處狹きまでに陳列せられたるが、翁の牙彫は多く海外に輸出せられたるため出品は牙彫よりも寧ろ木彫多數を占めたり、三日間の來觀者二千三百名に上り彫刻の展覧會としては稀に見るの盛會なりき。また朝倉文夫氏の原型加藤直泰氏の鑄造にかゝる同翁銅像は東京美術學校玄關前右側に建設せられ、四月一日午前十時遺族門下生知人來賓列席して除幕式を行ひたり、先づ三浦光風氏門下生總代として銅像建設の次第並に學校へ寄贈の辭を述べ、正木校長代理高村教授の受領の挨拶、令嗣石川光春氏の謝辭あり、

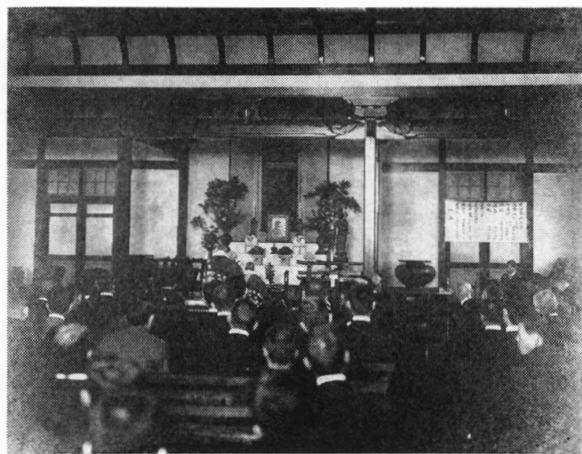
次で翁の令孫たる木村武山氏令嬢の手によりて除幕せられ、木村武山氏の挨拶にて、式を上野精養軒に於ける午饗會に移したるが、席上高村教授莊重の辭を以て故翁の徳を頌し、また笹川臨風氏の卓上演説あり頗る盛會なりき

なお、遺作展覽会主催者は大正六年五月『光明作品集』を刊行した。これには光明の略年譜と主な作品が掲載されている。

④ 岡倉覚三死去

大正二年九月二日、もと本校校長岡倉覚三は新潟県赤倉の山荘で死去した。晩年の岡倉はポストン美術館中国日本部部长(明治四十三年就任)として日米間往復の生活を続け、その間、ポストン美術館の美術品購入のため中国やインド、ヨーロッパを旅行し、日本では古社寺保存会や美術家たちのために尽くすなどした。彼は賢臟病が悪化したため、大正二年三月に帰国。同年八月には病をおして古社寺保存会に出席し、法隆寺金堂壁画保存について提案した後、俄かに重態に陥り、死去した。葬儀は九月五日に谷中斎場で約六百人参列のもとに行われ、染井墓地に埋葬された(九月、五浦に分骨)。次いで十月二十日にはポストンのガードナー夫人の音楽堂で追悼會が開かれ、また、翌十一月十五日には本校講堂で追悼會が開かれた。

本校における追悼會の様子は『東京美術学校校友会月報』第十二卷第六号の「芸苑叢報」欄と、同第七号の「祭祀」の欄に大きくとり上げられている。後者は「故岡倉先生追悼會の記」と題する詳細な記事で、追悼會案内状(発起人百五十六名名簿を含む)に次いで式次第



岡倉天心追悼會

が次のように記されている。

式場は東京美術學校の講堂と定めらる。乃ち講堂中央の壇上を迎神の處と爲し、祭壇正面に法隆寺所藏の法相曼荼羅を掲げ、其前に故人の遺影を安置し、右側に故人

が生前信仰せられたる快慶作彌勒菩薩像及經卷を据え、香花供物等は法の如し。本誌に挿入せる寫眞は即此有様を寫せるものなり。來會者陸續として踵を接し、時は午後一時三十分を過ぎぬ。是に於て司會者正木直彦氏は開會の辭を敘べられ、嚴かにその式を執行せられたり。乃ち左の如し。

追悼會式次第

開會挨拶	正木 直彦氏
作善講	講師大僧正 佐伯 定胤師
諷 誦	大僧正 大西 良慶師
散 華	佐伯 良謙師